

オジロトウネン *Calidris temminckii* (Leiser)

【選定理由】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸部から平野部の水田や蓮田、池沼や水路などの淡水湿地に飛来するが、数は多くない。以前は毎年のように沿岸部のほぼ同じ場所に飛来して越冬しており、1980年代には13羽の越冬記録もある。近年は越冬しない年が多く、渡りの季節に沿岸部から20km以上も離れた内陸で見られることもある。かつて沿岸部に広く存在していた淡水湿地の環境が、埋め立てや水田の隔年転作等による乾燥化により、餌となる生物が消滅した環境に変化している。

【形態】

全長 13～15cm、翼開長 34～37cm。夏羽は、頭から胸および上面が黄褐色で赤褐色と黒色の斑があり、頸から側胸にかけて細い縦斑がある。冬羽は、頭から胸および上面が一般的な灰褐色。幼羽は、冬羽に似るが上面の肩羽や雨覆に羽縁がある。嘴は、近縁種のトウネンに比べて細めで、脚は黄色。



愛知県愛西市, 2005年4月25日, 本田美佐緒 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

主に春秋の渡りで伊勢・三河湾の沿岸をはじめ、近年は内陸の淡水湿地にも飛来しており、越冬するものもいる。

【国内の分布】

春と秋の渡り時期に渡来し、本州中部より南や西では越冬する個体もいる。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部沿岸で繁殖し、アフリカ東部、インド、東南アジアなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内の沿岸部にある干拓地の歴史をみると、その昔には作付けのできない荒地が存在しており、戦後経済成長が進むと減反政策による休耕田が広く存在しており、本種のように淡水の湿地を好む種にとって、冬も乾燥しない水田や休耕田は最適の生息環境であった。水中や地上の小動物を捕食するが、湿地が凍る水辺での越冬は不可能である。

【現在の生息状況／減少の要因】

本来の生息地は伊勢・三河湾沿岸や木曾川左岸の干拓地であり、特に生息数の多かったのは矢作川河口から一色干潟に至る西尾市沿岸部の干拓地であった。近年は水田の隔年転作による乾燥化で、沿岸部の水田から餌生物が消滅しており、時に転作をしない内陸の水田に飛来することがある。

【保全上の留意点】

1990年代まで、国内でも愛知県はこの種を含む淡水系シギ・チドリの代表的な飛来地であり、生息数も越冬数も多かった。シギ・チドリの越冬が可能な条件は冬期に凍結しない湿地で、餌となる生物が多く生息していることである。以前にシギ・チドリ類が多く生息していた地域では、耕地の一部を休耕田とするか、あるいは転作の作物を飼料米などにするなどで湿地の環境を保全することが必要である。また、それらの水田では冬期も湛水することで、こうした環境に本来生息していた水棲生物や土壌生物の回復を図るべきである。

【特記事項】

以前は冬の気温が低く、湿地や水路が凍ることも少なくなかったが、特に旧幡豆郡一色町では養鰻場からの暖かい排水により、毎年のように越冬個体を見ることができた。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.122. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)